カトリック
仙台教区報

1999年　9月20日　No.136
発行
カトリック仙台司教区

〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
☎(022)222-7371 FAX(022)222-7378

元仙台教区長小林有方司教
七月三十一日　帰天
八十九歳

元仙台教区長ペトロ小林有方司教が、七月三十一日午前七時十二分、神戸海星病院で老衰のため帰天されました。

小林有方司教は、一九〇九年（明治四十二年）神戸市に生まれ、地元小学校を終えられ、暁星中学校（小神学校）に入学、一九二七年早稲田大学予科に入学、一九二九年～一九三五東京大神学校、その後カナダ・アンティゴーニッシェ聖フランシスコ・ザビエル大学に留学。

一九三五年司祭叙階、一九五四年三月司教・仙台教区長、その年の五月司教祝聖、一九七六年仙台教区長退任。教区長辞任後も米川教会主任司祭、米川聖マリア保育園園長、仙台白百合短期大学教授を務められました。

小林司教の仮通夜は、三十一日夜八時半から、大阪教区安田大司教、池永大司教、岡田司教、京都大塚司教、仙台教区佐藤守也神父らが出席して、神戸六甲教会で行われました。

本通夜は、八月二日夜七時から元寺小路教会大聖堂で白柳枢機卿、新潟佐藤司教、大阪松浦補佐司教、広島三末司教代理斎藤神父、仙台教区司祭、修道者、信徒ら約三百人が出席して、しめやかに行われました。

この通夜での説教は、白柳枢機卿が行い、小林司教の偉大な足跡を偲びました。

葬儀ミサと告別式は、三十数度の猛暑の中、八月三日午前十一時から大聖堂で、東京白柳枢機卿、新潟佐藤司教、浦和鈴木神父（岡田司教代理）名古屋野村司教、京都大塚司教、大阪松浦補佐司教、広島斎藤神父（三末司教代理）、福岡松永司教、鹿児島糸永司教、仙台教区の司祭の共同司式で、修道者、信徒ら三百余名が出席して行われました。

ミサの中で、別掲のような説教が白柳枢機卿によって行

生命の泉

人々にアンケートのような意見を集めて民意の動向を知るというようなことは一般的な方法として良く使われる。これも過信することは出来ない。というのは、設問の仕方や問う時の状況によって変化するからである。小渕政権の支持率は「ぐんぐん伸びている」そうだ。これまで議論百出で当分は法制化されないだろうと言われてきた、国旗国歌を始めとする難問は一挙に決まってしまう勢いである。これほどに懸案の法案が可決されるために首相自身が大した努力をしたとは言えないにも拘らずである。人々の関心が余所を向いているときにあれよあれよという間の感じがする。内閣が「なんとなく」支持され「人が警戒心を持たない」風貌を見ているうちに乗せられて行く怖さに気付かなければならない。エレミヤは乾季に先駆けて咲くアーモンドの木を「見張っている」と呼んだ。目覚めていよと叫ぶ声がする。

われ、告別式では、教皇様からのお悔やみの言葉（別掲）、駐日教皇庁大使アンブローズ・デ・パオリ大司教からのメッセージ（別掲）、教区司祭を代表して佐々木博神父の弔辞（別掲）、喪主鷹觜教区管理者、甥の小林有恒さんから挨拶があり、御礼の言葉が述べられました。

教皇様のメッセージ

（アンジェロ・ソダーノ枢機卿を通して）

教区管理者　鷹觜達衛殿

ペトロ小林有方司教の訃報に接し、教皇様は大変驚かれ、仙台司教区の皆さんと共に「よい牧者・この忠実な僕が、天に用意された宴の席に招かれるよう」祈っておられます。

また、教皇様は「ペトロ小林有方司教が長年にわたる司祭・司教としての奉仕を通して教会に与えられた様々な恵みに感謝をささげ、小林司教を失って嘆き悲しむ人々に、使徒的掩祝を送ります。」

白柳枢機卿の説教要旨

一九五四年に叙階されたペトロ小林有方司教様は、第二バチカン公会議に出席し、教会の扉を開き、聖霊に導かれて信徒の心も開いて行かなければならない決意したと推察しています。

第二バチカン公会議から帰って、「信徒使徒職の教令」などを翻訳し、その解説を見ても、その決意が並々ならぬものであったと思われます。

司教協議会では、財政、広報（カトリック新聞、放送）「心のともしびなどの責任者として立派な仕事をなさいました。小林司教より十年後輩の私に対して、賢明な指導をしていただいた。

一九七六年三月仙台教区長を退任された後も、キリシタン殉教の地米川において、「殉教者の血はキリスト信者の種である」との考えのもとに宣教布教に活躍しました。

小林司教の駆使する美しい言葉、その話術は大変優れたものでありました。一九六〇年に出版した「愛の教え」は、カトリック要理とも言えるもので、十年間に十三万三千部も売れたと聞いています。司教様が、天国において、神様と顔と顔を合わせられて、永遠の安らぎを得られるように祈ります。

駐日教皇庁大使　アムブローズ・デ・パオリ大司教

ペトロ小林有方司教の訃報に接し、深い哀悼の意を表します。

祈りのうちに、仙台司教区の司祭、修道者、信徒の皆さんに心からお悔みを申し上げます。

教会のために司教として長きにわたり献身し、キリストに対する信仰と忠実の模範を示して下さったことは教区民への大きな励ましとなったことと存じます。

心よりご冥福をお祈りします。

佐々木博神父弔辞（司祭団を代表して）

私が初めて小林司教様にお会いしたのは、司教叙階式の後、白百合学園でご講演なさったときでした。

その後、各小教区をお回りになって、丁度福島県原町教会に来られたとき、ミサが終わって歓迎会の席で不肖私が信徒の皆さんを代表して挨拶させられました。その時司教様から呼び止められ、「上智大学（神学校）に入って勉強してみないか、決心がついたら二週間後司教館にいらっしゃい」といわれました。私は二週間後に決心を伝えました。

その後司教様にお会いしたのは、私がカナダにおいて司祭に叙階されて間もないころでした。（その時司教様は仙台教区のために、カナダの教会の方々から献金をいただいていました。）

仙台教区に戻ったとき司教様はマスメディアを通じての宣教に力を入れていました。東北放送のラジオ番組「心の花束」、市民会館などで開かれたご講演では一般市民の心にひびくメッセージを送り続けたことなど印象に残っています。

典礼の刷新、聖霊による刷新の運動にも大きな貢献をなさいましたし、米川キリシタンの集団改宗という大事業を為し遂げました。またスペルマン病院の建設と経営にも力をそそがれました。

司教様、あなたは指導者である以上に根っからの司牧者でした。その愛の深さに触れた人々は決して司教様の事は忘れません。父親のような深い愛が、傷つき、悩み、苦しんでいる人に大きな慰めを与えました。

父なる神の愛の息吹である聖霊に満たされて九十年の生涯を終えられた司教様に次のみ言葉を捧げます。

「私は確信しています。死

も生命も天使も、支配するものも、今あるものも、後にくるものも、力あるものも、高いところにいるものも、深いところにいるものも、他のどんな被造物も、キリスト・イエスにおいて現れた神の愛から誰も私たちを引き離すことはできないのです。」

（ロマ書8－38～39）

追悼文

米川での集団洗礼式のこと

米川教会神父　高橋　昌

只野淳氏に案内されてはじめて米川に来られた小林司教様は、中学生に「外国から見た日本」大人に「美しきものへの憧れ」の題で講演し、多大な感銘を与えたのが、司教叙階の年、昭和二十九年の七月七日でした。講演がきっかけとなりカトリック研究会が生まれ、教理の勉強者が多くなり、昭和三十年七月十日に第一回集団洗礼式が米川中学校講堂で行なわれ、一七五名受洗し米川教会が誕生しました。同年にもう二回集団洗礼式があり計三百十一名受洗し、信者となりました。

あれから四十五年。小林司教様は心の古里として米川をこよなく愛し、仙台教区長勇退前から米川に住み、米川聖マリア保育園長を八年間なさり、園長勇退後も八年間米川に住み、米川の人たちと親しく交わられました。

小林司教様が米川を離れる時は、町を挙げての盛大な送別会となりました。

そして、岡山や神戸に移ってからも、米川の人たちとの交わりが絶えず、司祭叙階六十周年や米寿の祝いも盛大に行われました。

私は今年の三月に司教様にお会いし食事を共にいたしました。司教様が危篤の時に、米川の信者数名が付添いの手伝いに参りました。

故小林司教様のため、米川教会では九月二十三日(木)に午前十一時から追悼ミサを行ないます。皆様、できましたらご出席ください。

▲御遺体にお別れする信徒

米川キリシタン祭り

三経塚のミサに一五〇名

「米川キリシタンの里まつり」が、六月十六日(日)宮城県の県北東和町のキリシタン殉教地・三経塚で行われました。愛知県知多市の小坂隆司氏のフルート演奏が行われ、薫風の中で美しい音色が流れて、森にこだましました。

十一時から三経塚で行われたミサには、五名の司祭、百五十名の参加者（鎌倉の栄光学園の久我神父、愛知県東海教会から八名など遠方からの参加）があり、地元東和町から町長浅野敬氏、同議会議長菅原幸夫氏も出席して、あいさつがあり、ミサが捧げられました。（写真右）

説教は、北上教会、水沢教会主任司祭梅津明生神父が行ないました。

梅津神父は説教で「ご聖体の祝日であるこの日、ご聖体の恵みにあづかり、殉教者がごミサを大切にして、力をいただき信仰を貫き、殉教の栄冠を受けたことに思いを致し、祈りましょう。」と話されました。

三経塚の広場では、地元の特産物を売る多くの売店が並び、「田植え踊り」や、楽団の演奏、小坂氏の「フルート」演奏会も開かれ、昼食をとりながらの懇談となりました。

また、子供のための「川魚のつかみ取り大会」などもあり、仙台からきた天使園の子どもたちも楽しんでいました。

「米川キリシタン祭り」には、合計千五百名の参加がありました。

10月31日　仙台病障連で障害者セミナー開催

大阪教区　後藤　進神父講演

仙台司教区病者・障害者団体連合会では、十月三十一日十一時から仙台・元寺小路教会で次のような題で障害者セミナーを開催、障害のある人も、ない人も参加してみませんか。

「小さい人弱い人とともに十字架の秘義を生きる」という題で、大阪教区後藤進神父に講演していただきます。

仙台病障連では、司教協議会社会司教委員会の「障害の重荷をともに担える日を目ざして」の発行を機会に、一九九六年六月一日に「障害者セミナー」を開催し、各方面に大きな反響を呼び、障害者に対する理解も深まったと思っています。

しかし、障害の意味を問い、深い神の計らいがわかるまで障害を持つ人も、持たない人も、もう少しお互いの理解を深めてほしいと思ってセミナーを企画しました。どなたでも結構です。ご参加下さい。

東ティモールについて
日本政府に要望書
常任司教委員会

日本カトリック司教協議会・常任司教委員会では、東ティモール紛争解決に対して、日本政府が実効ある協力をするために、九月十日、次のような要望書を出しました。

①インドネシア政府は直ちに東ティモールの治安維持に関する全権を国連に委譲するよう、強く働きかけること。
②インドネシア政府から国連に委譲されるときには「力の空白」が生まれ、さらなる殺りくや暴力が行われないためのあらゆる方策をとるよう、申し入れること。
③国際合意に反し、今回の事態を招いたインドネシア国軍・警察ならびに民兵組織の人権侵害に関しては、徹底的な事実究明と責任追求を行うよう求めること。
④インドネシア政府が上記事実を実行したことが確認されるまで、二国間及び多国間経済支援の即時停止を含む、実効性のある措置をとること。

平和を祈って

教区管理者　鷹觜　達衛　神父

神様ではない私たちにとって、常に平和でいることは難しいことです。教会において、特に、政治とか社会問題、あるいは教会自体の在り方を話し合う時に、意見の食い違いが生じると、素直に話し合うことが敬遠されるようになり、いつしか「この指とまれ」的なグループ、つまり「特定の人たちの」と思われてしまうような活動体が生まれ、その結果、それに同調できない人たちの不満が教会のどこかに浮遊し、分裂や無関心の原因となっていくことがあるように思います。

互いの意見が自由に提示され、相手に対する尊敬のうちに十分論議が交わされ、結論より過程が大切にされて、参加できる人もできない人も、お互い「踊る阿呆（あほう）に見る阿呆」の好ましい関係になったらいいなと思います。

確かに大勢の人の中で意見の一致を見ることは難しいことですが、しかし私たちには可能なのだという確信が必要で、それは祈りの力ではないでしょうか。イエスは、どんな人に対しても、どんな時にでも、そばに立ってその人の心の戸をたたき、その人の中に入れてもらって一緒に食事をし、いろいろと語らいをしたいと願っておられると言います（黙示録3・20）。とすれば私たち一人ひとりがそのようなイエスの願いを受け入れ、イエスとの語らいを深めていくならば、お互いの語らいにおいても、人間的な弱さに基づく不信とか分裂を乗り越え、バランスの取れた平和な考え方、つまり一緒に食事をすることができるようになれるのではないでしょうか。

大聖年を前にして、お互いが許しと和解の精神のうちに、神様のお望みを中心に考えて行動することの大切さをより深く認識する恵みを祈りたいと思います。

神学院の改築について

東京カトリック神学院
院長　寺西　英夫

この神学院の建物は、一九六〇年に建て替えられたもので東西百米、地上四階、地下一階の巨大な建物で、神学生百五十人分の個室を要するものですので、改修は必要最小限にとどめても、五億はかかるということでした。

その後の司教会議で、縮小新築の方向を選択いたしましたのは一九九六年六月のことです。

新しい建物は、前庭に二階建てで造る（昔校舎のあったところ）。神学生個室は四〇室、教室は最大生徒数六〇名、聖堂、食堂等は約百名に対応できるものとし、将来、必要であれば（たとえば神学院の統合）増築できるようにする。総工費は、築後の現校舎の解体費を含めて、およそ十六億円ということになりました。

各教区の財政事情を考えると、この全費用を分担して募金することは難しく、また外国からの献金に頼らない事にいたしましたので、やむを得ず土地の一部（北側の石神川沿い、全敷地の五分の一）を売却する事に決定いたしました。

現在（五月中旬）土地売却の契約も終わり、資金の目途がつきましたので、練馬区役所に建築確認申請を出しており、許可がおり次第、先ずシスターたちの修道院を新築し（売却地に位置しているので）その間、本工事の契約、施工を進めていくことになります。

順調に行けば、本年十月着工、来年夏完成。十月からの後期は新しい建物となります。

総工費の資金の目途がついたとはいえ、どうしても新しく購入しなければならない備品も多く、また将来の必要に備え、増築の資金も残しておかなければなりません。引き続き、皆様の献金を切にお願いいたします。

なお昨年度のご寄付は次のとおりでした。

建設寄付金
二六、一八一、五〇二円

援助金
一六、七七一、七六八円

厚く、御礼申し上げます。

第十回　青森市カトリック婦人の集い　総会開催

聖霊降臨の祝日である五月二十三日、当番の篠田教会において、第十回「青森市カトリック婦人の集い」の総会が、六十数名が参加して開かれました。

「青森市カトリック婦人の集い」は、青森市内の四つの教会の婦人信徒が、相互の親睦と福音宣教を目的として、一九八九年に設立されました。

（指導司祭ラヴォア神父）

この日十一時から、ラヴォア神父の祈り、一九九八年度事業報告や九九年度予算案、役員選出、各教会から主な活動が紹介され、午後十二時過ぎ閉会しました。

昼食後、仙台スペルマン病院のホスピス病棟に勤務の看護婦牛坂さんから「信仰を通してのホスピスケア」についてスライドを使って、ホスピスの実情を話されました。

同病棟のボランティア沖村さんは、「病気は神様からのプレゼント」と題して話されました。自分がガンであること、闘病の悩みを話されました。切なく苦しいお話しでしたが、気が付いてみると、かえって勇気と励ましを頂いたように思いました。

最後に沖村さんが自作の詩を朗読して下さいました。

「私のたからもの」

わたしのたからものそれはガンです。私の知らない私に出会いました。その名前はガンです。私の「弱さ」と「限界」を悲しみました。でも不思議です。

愛せなかったことが愛せるようになりました。許せなかったことが許せるようになりました。限りある生命、生かされて生きる私、神が私にくださった恵みです。

（文　佐藤　正子）

▲篠田教会での青森市婦人の集い

‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡

仙台キリスト教連合　合同平和祈祷集会

八月十五日

仙台キリスト教連合では、八月十五日、「平和を求めるキリスト者合同祈祷集会」が、仙台・元寺小路教会で、約百十名が出席して行われました。

はじめに、仙台キリスト教連合代表杉山昭男牧師（日本福音ルーテル鶴ケ谷教会）があいさつし、メッセージは、エレミヤ書6章17節を用いて「神の国望みつつ」という演題で、日本キリスト教団世界宣教委員長川端純四郎牧師が力強く平和を説きました。

最後に平和を求めて黙祷を行い祈祷集会をしめくくりました。

‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡

手話の会　再スタート

九月二日（木）

従来仙台司教区病者・障害者団体連合会の一組織として活躍して来た「手話サークル」が活動を止め、再スタートの機会を待っていたところ、このほど南条信義さん（宮城・白石教会）を講師として、九月二日(木)から再スタートしました。現在会員は、十五名。

‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡

福島県カ障協　結成十周年記念事業

渡辺和子さんが講演

福島県カトリック病者・障害者協議会（会長清水文雄さん）結成十周年記念の事業が、十一月二十三日、いわき市湯本の「ゆったり館」で開催されます。

記念式典、記念ミサ、記念の講演は、渡辺和子さんが行います。

福島県カ障協は、福島県に住むカトリックの病者・障害者らが加入している団体で、会員約百名、毎年総会のほか「ふれあいフォーラム」などを行っています。

投稿

一人や二人の障害者でも大きな配慮してほしい

清水　文雄

昨年九月十三日に行われた〝福島県信徒の集い〟にまつわる話です。

いわき地区・四教会のそうそうたるメンバーが一堂に会し、〝集い〟に関する反省会の席上でのこと。

「今回の〝集い〟では、障害者への配慮がなされていなかった。今後、このようなことのないように…」との意見が出された。すると、ある信徒会長が「たった一人や二人の障害者しか参加しないのに、その人たちのために配慮することは大変だ。そんな必要はないと思う。」との発言があったが、これに対して、誰一人反論する人がいなかったとのことです。

思うにこのような発言こそ口には出さないまでも、信徒の集いである共同体の中に秘められている考えを表しているのではないでしょうか。

ファリサイ派の人たちや律法学者に向かって話された「迷える羊」のたとえが思い浮かびます。一匹の羊のために皆が喜び、祝い、踊る日は一体いつの日のことでしょうか。

カトリック宮城県大会
太田道子さん講演

白百合学園に五百余人
七月四日

第二十七回カトリック宮城県大会が、七月四日仙台市泉区の仙台白百合学園レジナパーチェスホールで、県内十七教会からの信徒五百余名が出席して開催されました。

午前中は、太田道子さん（聖書学者、NGO「地に平和」代表）の講演「主の祈り―ひとつの読み方―」があって、昼食の後、県内司祭の共同司式によってミサが捧げられました。

太田道子さんは、「主の祈り」はヘブライ詩文の対句法によって四つの対句に分かれている。イエスは主の祈りをなんとなくだらだらと言われたのではないことが分かる。

第四の対句「必要な糧が日ごとにあるように」というのは、モーゼが言ったように神のパンは神の言葉と共に与えられるという事です。神の前で神と話し合いながら自分自身で必要な量を決める。世界の現状をみると八人のうち七人は飢餓線上にある。自分がキリスト者として生きて行くには最低これだけ必要だとそれぞれにきめると言うのが「日々の糧」ということになる。現代世界に生きるクリスチャンとして、貧困、飢え、渇きから解放されていない人々を解放するという生き方を求められている祈りであると強調されました。

（写真右上講演する太田道子さん）

福島県カトリックの集い
森一弘司教が講演

八月二十九日
いわき市で開催

今年のテーマは、「紀元二千年の至来・父なる神　①神と隣人への愛の実践②貧しい人、社会から見捨てられた人と優先して関わること」で、森一弘司教の講演とミサがささげられました。

森司教は、今年の集いのテーマに沿って、「放蕩息子のたとえ」（ルカ15章11節～32節）一時間半にわたって熱弁をふるいました。

集いは、午後一時半からミサがささげられ会を締めくくりました。

"エイズから学ぶ"講演会開催

教区人権福祉委員会

人権福祉委員会では、七月八日、元寺小路教会でHIV人権情報センター全国事務局長五島真理為（大阪教区夙川教会所属）さんを招いて、「生命の輝き～エイズから学ぶ」と題する講演を「共に聞く会」を開催しました。

五島さんは、ご自分も難病や視力障害者で、HIV（エイズウイルス）感染者のカウンセリングや生活支援に取り組み、国内のみならず国際的にも活躍しています。

五島さんはさらにHIV感染者や発症者の大部分が死への恐怖、孤独、貧困に苦しんでおり、私たちは彼らと「きずな」を作って、共に生きるため無関心から脱却することによって、互いに生命のすばらしさを知らされるということを強調していました。

▲仙台・元寺小路教会信徒ホールで講演する五島さん

＋＋＋＋＋＋＋

教区大聖年委員会から
『もう一つのお願い』

今年も八月の平和旬間に向けて人権福祉委員会と大聖年委員会の連名で各小教区宛にお願いの文をお送りいたしました。その内容は「今日本の社会はあらゆる面で混迷の度を深めています。その中にあって、私たちがクリスチャンであること、カトリックであることの根拠はどこにあるのでしょうか。私たちは、まず聖書と教皇様の言葉に耳を傾けるという信仰の基本に立ち戻る必要があるのではないか」という願いを込めた文章でした。